

Ⅲ 令和6年度下半期企画展『弥生のかご 暮らしを彩る「用の美」』の記録

開催趣旨

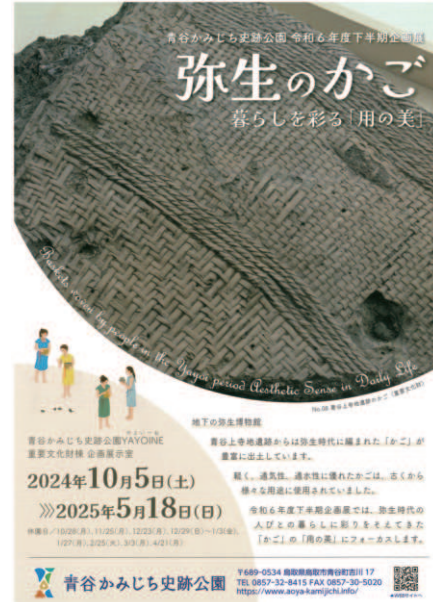
青谷上寺地遺跡から豊富に出土しているかごは、であった。令和6年度下半期企画展では、弥生時代の生活に欠かせない道具であると同時に、生活に彩りをそえてきた「かご」をテーマとし、その巧みな「手仕事」、そして「用の美」を紹介した。

会期：令和6年10月5日（土）～

令和7年5月18日（日）

関連事業

- ・「大人のワークショップ弥生のかごづくり」
- ・土曜講座 『弥生のかごー暮らしを彩る「用の美」』（講師：瀧田竜彦）



ポスター

展示資料一覧

	種 類	遺跡	時 期	素材	体部の編組技法	資料番号
1	かご※	高住井手添遺跡	縄文時代晩期後葉 ／弥生時代前期前葉	ヒノキ	もじり編み	鳥取県 2015 『高住井手添遺跡』 図 136 W45-1
2	かご※	高住井手添遺跡	縄文時代晩期後葉 ／弥生時代前期前葉	ヒノキ	もじり編み	鳥取県 2015 『高住井手添遺跡』 図 143 W52
3	かご※	高住井手添遺跡	縄文時代晩期後葉 ／弥生時代前期前葉	ヒノキ テイカカズラ	もじり編み	鳥取県 2015 『高住井手添遺跡』 図 140 W49
4	てみ※	金沢坂津口遺跡	弥生時代前期前葉～後葉	ツヅラフジ ほか	ござ目編み	鳥取県 2017 『金沢坂津口遺跡』 第 159 図 W91
5	かご	青谷上寺地遺跡 7 区	弥生時代中期後葉	マタタビほか	ヨコ添えもじり編み	『木製容器・かご』 第 98 図 1 (写真 45)
6	かご (重要文化財)	青谷上寺地遺跡 8 区	弥生時代中期)	マタタビほか	網代編み	『木製容器・かご』 第 116 図 14 (写真 64)
7	かご	青谷上寺地遺跡 7 区	弥生時代中期後葉	マタタビ	網代編み	『木製容器・かご』 第 109 図 9 (写真 57)
8	かご (復元)		—	マタタビ	網代編み	『木製容器・かご』 写真 54
9	かご (重要文化財)	青谷上寺地遺跡 7 区	弥生時代中期後葉	マタタビ	網代編み	『木製容器・かご』 第 106 図 6 (写真 49)
10	かご (復元)		—	マタタビ	網代編み	『木製容器・かご』 写真 50
11	かご	青谷上寺地遺跡 7 区	弥生時代中期後葉	広葉樹	ヨコ添えもじり編み	『木製容器・かご』 第 108 図 7 (写真 51)
12	脚 (底部補強材)	青谷上寺地遺跡 7 区		針葉樹?	—	『木製容器・かご』 写真 53
13	脚 (指物) (重要文化財)	青谷上寺地遺跡 7 区	弥生中期後葉	スギ	—	『木製容器・かご』 第 69 図 295 (写真 42 上段)

※ 埋蔵文化財センター所蔵資料

鳥取県東部における 弥生時代の始まり

かつて鳥取県の東部は「因幡^{いんぱん}」の国と呼ばれていました。この国名は、古代に国庁が置かれた法美郡稲葉郷（現・鳥取市国府町周辺）にちなむとされ、古くから米づくりが盛んな土地柄だったことがうかがわれます。では、この地域で本格的な米づくりが始まったのはいつ頃なのか。現在、鳥取市内の遺跡から紀元前 7 世紀代にさかのぼる土器に付着したイネの圧痕が見つかっています。おそらく、この頃に本格的な水田稲作が始まり、しだいに広まっていったようです。

なお、本格的な水田稲作を伝えたのは、九州地方の北部から山口県西部で弥生土器を製作、使用していた人びと。彼らから新たな文化を受け取ったのは、縄文土器を製作、使用していた人びとでした。鳥取県の東部では、お米作りが伝わってからしばらくの間は、縄文的な生活文化と弥生的な生活文化が混在する状況にあったようです。

この頃に使用されていた「かご」にも縄文時代の伝統と製作技術を引き継ぐもの、米づくりと共に伝わった新たな特徴を備えたものがあります。ここでは、縄文時代の遺跡が多く分布する湖山池沿岸にある高住井手添遺跡と金沢坂津口遺跡から出土した弥生時代開始期～前期の「かご」と「てみ」を紹介します。

たかすみ い で ぞえ 高住井手添遺跡 (鳥取市高住字井手添)

高住井手添遺跡は、鳥取平野を形成した千代川の西岸に広がる湖山池の南側にあります。山陰自動車道（鳥取西道路）の建設に先立つ発掘調査によって、縄文時代から近世に至るたくさんの遺構や遺物が発見され、弥生時代開始期に埋まった河川跡からは、その時期に製作、使用されていた「かご」が出土しました。

高住井手添遺跡のかごは保存状態の良いものが多く、縄文時代の伝統を色濃く残した形や製作技術をしっかりと観察することができます。また、かごを編むためにヒノキを割り裂いて作った細いひごの束なども見つかっています。

本格的なお米作りが始まる弥生時代開始期に、湖山池に流れ込む河川のそばで、人びとがヒノキを加工し、縄文時代の技術でかごを編んでいたようすがうかがわれます。



No.1

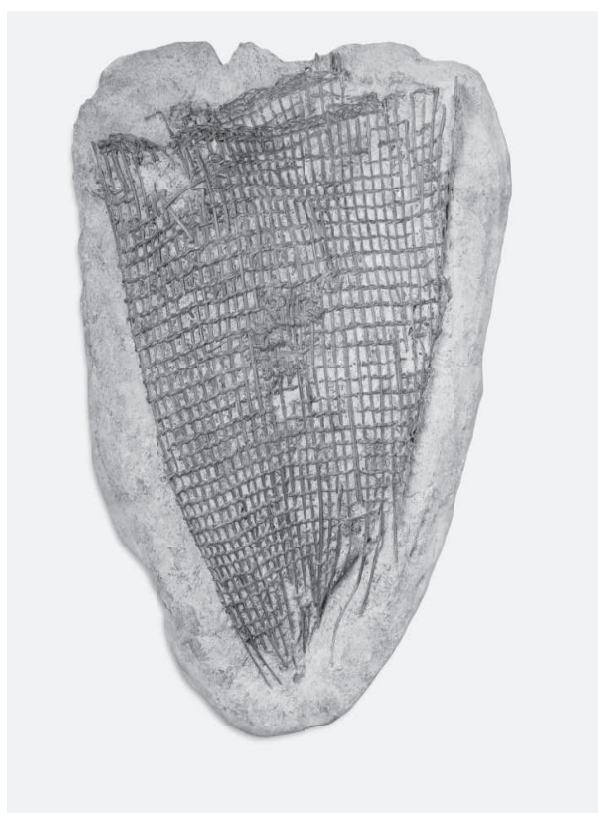
所蔵：鳥取県埋蔵文化財センター

かご
Basket

高住井手添遺跡

縄文時代晩期後葉／弥生時代前期前葉
(紀元前 8 世紀以降)

素材：ヒノキ (タテ・ヨコ材)



No.2

所蔵：鳥取県埋蔵文化財センター

かご
Basket

高住井手添遺跡

縄文時代晩期後葉／弥生時代前期前葉
(紀元前 8 世紀以降)

素材：ヒノキ (タテ・ヨコ材)

高住井手添遺跡のかご

弥生時代開始期に埋まった河川跡から12点のかごが出土しています。いずれも体部は「もじり編み」という技法で製作されています。素材は、タテ材、ヨコ材ともにヒノキを割り裂いたひごです。口縁部はタテ材の余りを斜め下方向に折り返して、直下のヨコ材に差し込み、矢羽根状の美しい縁をなしています。どのかごも水流や土圧の影響により欠損、変形しているので、底部まで完全な形を保っているものはありませんが、「網代（あじろ）編み」という技法で編まれた円形で平らな形をした底部の残片が出土しています。

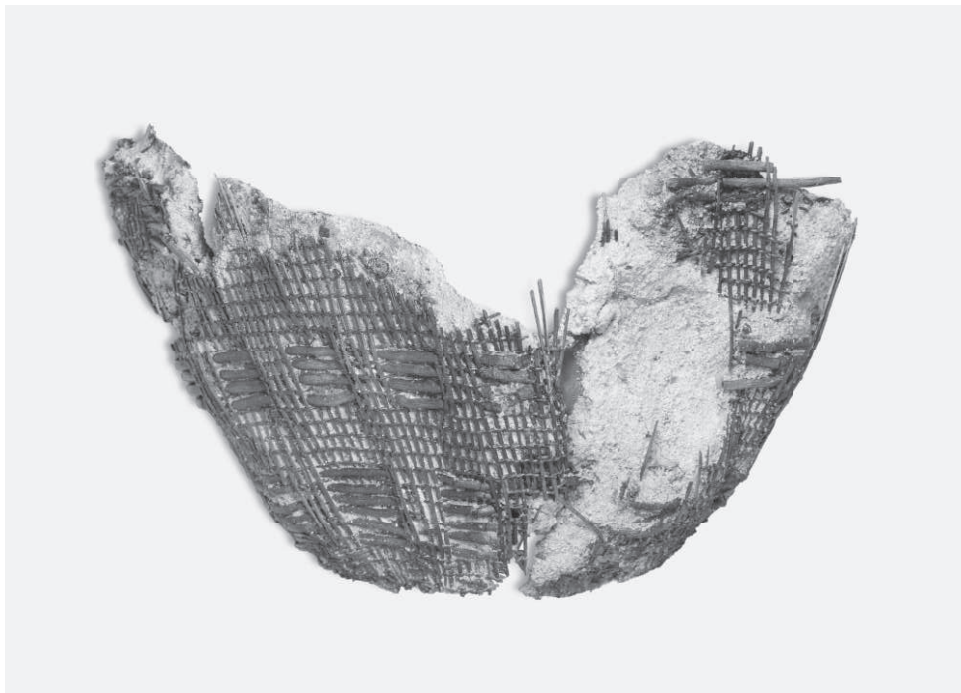
この12点のかごには、縦に細長い形をしたもの（No.1、2）と、広口でバスケットのような形をしたもの（No.3）があります。広口・バスケット形のかごには、口縁部の下部や体部にテイカカズラのつるを素材とする帯が加えられています。広口のかごは容量が大きくなるため、帯材を加えて、体部を補強していたようです。また、この帯は側面を美しく見せる装飾の役割も果たしています。

なお、No.2の体部にはほつれた部分をふさいだ痕が残っています。丹精を尽くして編まれたかごを長くたいせつに使い続ける気持ちの表れでしょう。補修の痕が、このかごの「用の美」をより確実なものとしているように思えます。

束ねられたかごの素材

高住井手添遺跡では、かごと共にヒノキ材を割り裂いて作ったひご（かごの素材）の束が出土しています。割り裂かれたヒノキ材の長さは50～60cmくらいのものが多く、かごに使用されているひごの長さに対応しています。

なお、かごに使用されているタテ材、ヨコ材の幅（厚み）はどれも2mm前後ですが、素材の束には幅や厚みが5mm以上あるものが含まれています。かごを編むには、まだ、割り裂いて細くする必要があります。ひごが完成する間近のところまで加工が進んだヒノキ材が、束ねられていたのでしょう。



No.3 所蔵：鳥取県埋蔵文化財センター

かご Basket

高住井手添遺跡

縄文時代晩期後葉／弥生時代前期前葉
（紀元前8世紀以降）

素材：ヒノキ（タテ・ヨコ材）、テイカカズラ（帯材）

かなざわさかつぐち

金沢坂津口遺跡

(鳥取市金沢字坂津口ほか)

金沢坂津口遺跡は、鳥取平野を形成した千代川の西岸に広がる湖山池の南西側にあります。

高住井手添遺跡と同様に山陰自動車道（鳥取西道路）の建設に先立つ発掘調査によって、縄文時代から近世に至るたくさんの遺構や遺物が発見され、弥生時代前期に埋まった河川跡から「てみ（手箕）」が出土しました。

てみはかごの親戚のようなもので、かごと同様に植物から得られた素材を編んで製作された農具です。金沢坂津口遺跡のてみはほぼ完全な形を保った優品で、製作技術や形をしっかりと観察できます。鳥取県の東部で、水田を利用した米作りが定着した時代の農作業を考える上でとても重要な資料です。



金沢坂津口遺跡のてみ

てみは、脱穀したイネなどの穀物から^{もみがら}の不要なものを取り除く道具です。てみに入れた穀物を揺すって、浮いてきた不要な部分を手を取り除いたり、^{あか}煽って外に飛ばしたりして、実だけを選びだします。

てみには平面形が丸い形をしたものと、U 字形をしたもの（方口タイプ）があります。金沢坂津口遺跡のてみは、幅の広いU字形をした方口タイプです。

このてみは「ござ目編み」という技法で編まれており、ヨコ材にはヤナギ属の枝、タテ材のうち、中央部分にはツヅラフジの枝、両端の左右 6 列にはサクラ属の樹皮を加工した素材が用いられています。また、U 字形の枠材には、アカガシ亜属の枝の丸木を使用しており、シダ植物の葉柄で巻いて固定しています。

このように、金沢坂津口遺跡のてみは、部位によって素材を見事に使い分けています。弥生時代の人びとは利用価値の高い植物について豊富な知識を持っていました。おそらく適材を適所に使用しているのでしょう。弥生時代の「手仕事」、「用の美」を今に伝える一品です。



No.4

所蔵：鳥取県埋蔵文化財センター

てみ

Winnowing basket

金沢坂津口遺跡

縄文時代晩期後葉／弥生時代前期前葉

(紀元前 8 世紀以降)

素材：ツヅラフジ・サクラ（タテ材）、ヤナギ属（ヨコ材）
アカガシ亜属・シダ属の葉柄（枠材）

青谷上寺地遺跡のかご

青谷上寺地遺跡では、弥生時代中期後葉の地層や遺構から、60点を超えるかごが出土しています。保存状態の良質なものが多く、かごに使用されている素材、かごの編み方を詳しく知ることができます。

もっとも多く用いられている素材は、マタタビ属（主にマタタビ）のつるを加工したひごです。1～2年生の若いつるを分割し、表皮と軟らかい髓（^{すい}）を取り除いて、ひごを作っています。

かご作りにおいて、ひご作りはとても重要な作業です。ひごの幅、厚さが揃っていないと、精度の高い、美しいかごは編めないからです。青谷上寺地遺跡のかごには、とても丁寧に薄く加工されたひごが使用されており、弥生人の手仕事の確かさがうかがわれます。

コラム「かごにマタタビ」

マタタビは東アジアに広く分布するマタタビ科マタタビ属のつる性植物です。日本各地の山地に自生しています。

ところで、マタタビといえば、ネコが連想されますが、知る人ぞ知る優れたかごの素材で、今もマタタビをかご細工に用いている地域があります。マタタビ製のかごは手触りがしなやかで、水切れが良く、お米を研ぐざるや、そばを盛るざるに最適なのだとか。青谷上寺地遺跡の弥生人もマタタビ製のかごでお米を研いでいたかもしれませんね？

おや ぼね 親骨

青谷上寺地遺跡から出土したかごの中には、口縁の帯部と、体部との境界に、「親骨」という1本の部材を加えたものがあります。

No.5に観察できる親骨は、数カ所が樹皮で緊縛されています。親骨は、かごのタテ材、ヨコ材として使用されているマタタビ製のひごよりも太く、幅の広い材が用いられているので、かごの強度を高める役割を果たしていたと考えられます。



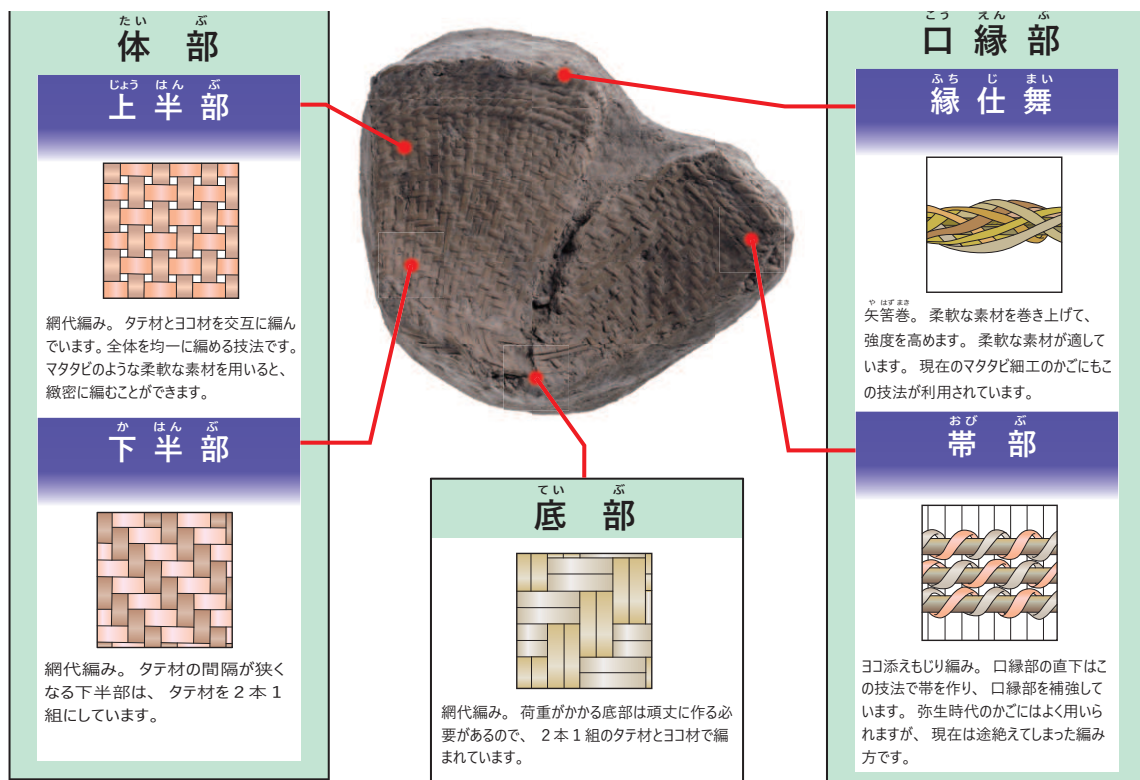
No.5

かご

Basket

青谷上寺地遺跡
第1次発掘調査7区

弥生時代中期後葉（紀元前2～後1世紀前後）
素材：マタタビ（タテ・ヨコ材）、広葉樹の散孔材（縁材）



No.6 重要文化財

かご

Basket

青谷上寺地遺跡
第1次発掘調査8区

弥生時代中期（紀元前4～後1世紀前葉）
素材：マタタビ（タテ・ヨコ材）、未開荒木材（帯材）

マタタビで編まれたかご

マタタビ製のひごで No.7 のかごの復元を試みたバスケター作家の本間一恵さんによる復元記録には、マタタビという素材に関する興味深い所見が記されています。

- ① 水をすぐに吸収するが、乾くのも早い。
- ② 水を含むとしなやかになる。
- ③ 耐久性に優れていて、編んだ素材をほどいても、まったく劣化しないので、そのまま再使用できる。

(2005 年『青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告 1 木製容器・かご』)

マタタビ製のひごは、米を研ぐなどの水場の仕事に適した特性を持っていて、繰り返し、長く使える優れた素材であることがうかがわれます。

ところで、青谷上寺地遺跡から出土したマタタビ製のかごを見た本間さんは、今も作られているマタタビ細工のひごの厚さと、弥生時代のかごに用いられたひごの薄さとのギャップに驚き、「なぜこんなに丁寧につくる必要があったのだろうか」と感じたそうです。復元を終えても、この疑問は解決しなかったとありますが、本間さんの試行錯誤によって、薄くて、軽い、しなやかで弾力のある弥生時代のかごがよみがえりました。これほど繊細なかごを、弥生時代にはどのような職人が、どのようにして作っていたのか気になります。



No.8

かご (復元品)
Basket

素材：マタタビ



No.7

かご

Basket

青谷上寺地遺跡
第1次発掘調査7区

弥生時代中期後葉 (紀元前2～後1世紀前後)
素材：マタタビ (タテ・ヨコ材)、広葉樹の樹皮材 (帯材)



No.9 重要文化財

かご

Basket

青谷上寺地遺跡
第1次発掘調査7区
弥生時代中期後葉（紀元前2～後1世紀前後）
素材：マタタビ



わたたのソーケ



No.10

かご (復元品)

Basket

素材：マタタビ

鳥取県にも、八頭郡若桜町にマタタビ製のかご作りが伝わっています。「わたた」とはマタタビの方言。「ソーケ」とはざるの古称。かつては、ざるのことをソーケ、ソウケ、ショウケ、ソーキなどと呼ぶ地域が全国に多くありました。つまり、「わたたのソーケ」とはマタタビのざるのことです。

わたたのソーケは、丸くて、浅いかごの一種で、厚みのあるひごで編まれています。弥生時代のかごに比べると、作りはかなりおおらかで、見た目もやや重厚な感じがします。

なお、若桜町では、このソーケをトチ餅を作る際、トチを水につけて、アクを抜くのに使用しているようです。竹のソーケは水につけておくと痛んでしまうので、絶対にわたたのソーケが良いのだとか。やはり、マタタビ製のひごは水との相性が良いようです。



わたたのソーケ

あし かごの脚

No.11のかごは底部を上に向けて埋まっていた。その底部の上に乗っていたのが、No. 12 の木製品です。この木製品は細長い角柱で、平坦に整えられた面の 2ヶ所に「えぐり」があります。何に使用されたものなのでしょう。

石川県小松市の白江梯川遺跡から、類似した木製品で底部を補強したかごが見つかっています。本来、No.9のかごには、白江梯川遺跡例のように2個1対の木製品が底部を補強する脚として取り付けられていたと考えられます。



No.12

脚

(底部補強材)
Foot (Bottom reinforcement material)

青谷上寺地遺跡
第1次発掘調査7区
弥生時代中期後葉 (紀元前2～後1世紀前葉)
素材：未炭化木材 (針葉樹か?)



No.11

かご

Basket

青谷上寺地遺跡
第1次発掘調査7区
弥生時代中期後葉 (紀元前2～後1世紀前葉)

しほうころ 四方転びの箱

No. 13 は 4 枚の台形の側板を組み合わせた木製品です。側板の下半は半円形にカットされています。側板が傾斜した箱形の木製品は「四方転びの箱」と呼ばれていましたが、底板もなく、その用途は長らく不明でした。ところが、奈良県橿原市にある瀬田遺跡で発見された保存状態の良いかごの底面に、四方転びの箱が付属しており、この謎の箱は「かごの脚」だったことが明らかになったのです。

瀬田遺跡のかごの脚も側板の下半が半円形にカットされており、No. 13 ととても良く似ています。No. 13 も本来はかごの底面に取り付けてあったものと考えられます。



No.13 重要文化財

脚

(四方転びの箱)

Foot

青谷上寺地遺跡
第1次発掘調査7区
弥生時代中期後葉 (紀元前2～後1世紀前葉)
素材：スギ